

平安京右京一条四坊十三町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京一条四坊十三町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび病院移転改築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

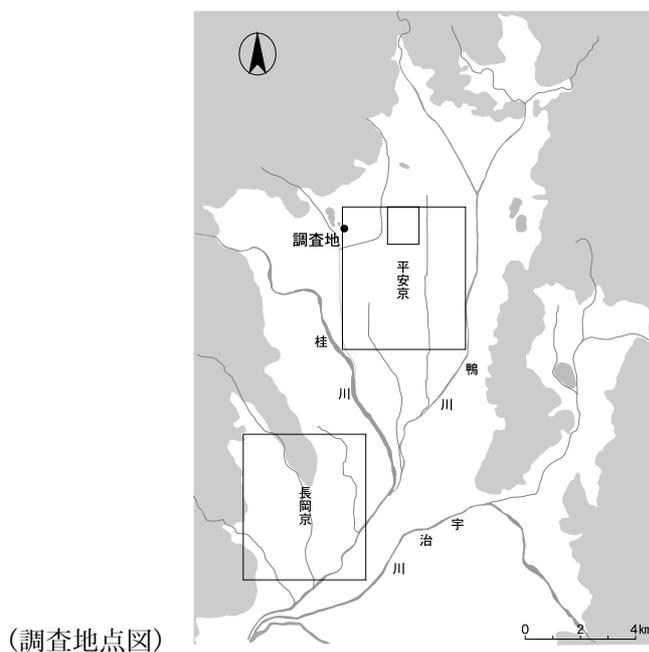
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成16年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京一条四坊十三町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市右京区花園伊町41-7 |
| 3 委 託 者 | 財団法人 泉谷病院 理事長 泉谷 守 |
| 4 調査期間 | 2004年 6 月 7 日～2004年 8 月28日 |
| 5 調査面積 | 700m ² |
| 6 調査担当者 | モンペティ恭代・津々池惣一・加納敬二 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 図版の順に番号を付した |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | モンペティ恭代・津々池惣一 |
| 18 編集・調整 | 児玉光世・大立目 一 |



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	1
(1) 位置と環境	1
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	6
(1) 層序と遺構の概要	6
(2) 第1面の遺構	6
(3) 第2面の遺構	10
(4) 第3面の遺構	10
(5) 第4面の遺構	11
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	13
(3) その他の出土遺物	15
5. ま と め	18
(1) 遺構の変遷	18
(2) 園池	20

図 版 目 次

図版1	遺構	第1面遺構実測図（1：250）
図版2	遺構	第2面遺構実測図（1：250）
図版3	遺構	第3面および1996年度2次3区遺構実測図（1：200）
図版4	遺構	第4面遺構実測図（1：250）
図版5	遺構	1 第1面全景（東から） 2 新期の池（北東から）
図版6	遺構	1 新期の池の汀（南西から） 2 新期の池近景（北東から） 3 新期の池遺物出土状況（南から）
図版7	遺構	1 第2面全景（東から） 2 古期の池（北東から）

- 図版8 遺構 1 古期の池の汀（北東から）
 2 古期の池遺物出土状況（南東から）
 3 古期の池洲浜部下層 粘質土で固めて形成されている汀（東から）
- 図版9 遺構 1 第3面柱穴群全景（北から）
 2 調査区西壁整地層（北から）
- 図版10 遺構 1 第4面旧流路西側（南東から）
 2 第4面旧流路東側（南西から）
- 図版11 遺構 1 拡張区全景（西から）
 2 拡張区古期の池（西から）
 3 拡張区北壁整地層（南から）
- 図版12 遺物 出土土器
- 図版13 遺物 出土土器・石製品
- 図版14 遺物 出土軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査前全景（東から）	1
図2	作業風景	1
図3	調査位置図（1：2,500）	2
図4	周辺主要遺構配置図（1：2,000）	4
図5	『中古京師内外地圖』に描かれた待賢門院ノ仁和寺殿	5
図6	南壁断面図（1：50）	7
図7	北壁断面図（1：50）	8
図8	拡張区北壁断面図（1：50）	9
図9	出土遺物実測図（1：4）	12
図10	出土軒瓦拓影・実測図（1：3）	14
図11	へら描をもつ軒平瓦拓影（1：1）	17
図12	刻印のある平瓦拓影・実測図（1：3）	17
図13	石器実測図（1：1）	17
図14	調査地周辺地形図（1：10,000）	19
図15	右京一条四坊十三町周辺遺構平面図（1：1,000）	20

表 目 次

表1	周辺の主要な調査一覧表	3
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	11

平安京右京一条四坊十三町跡

1. 調査経過

この発掘調査は、泉谷病院移転改築工事に伴うもので、調査地は京都市右京区花園伊町41-7に所在する。本調査地に隣接する既調査では平安時代後期の池跡などを検出しており、関連遺構の検出が予測されたため工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査予定地には南側がJRの高架と接しているため、安全を考慮し、敷地南限から2.5m以上の距離をとって調査区を設け、東側を残土置場とした。その後、遺構の規模を解明するために、調査区を幅4mで東へ20m拡張した。調査は2004年6月7日から付帯工事を開始し、2004年8月28日に全機材を撤去して現場作業を終了した。

なお、園池の検出に伴い7月22日に報道発表、7月24日に現地説明会を行った。現地説明会の参加者は約200名であった。さらに、下層の旧流路確認に伴い再度報道発表を8月13日に行った。

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

調査地は、双ヶ丘南東麓で西ノ川と宇多川の間に形成された小扇状地上、標高53.6mの五位山を北東に臨む平坦地に位置している。近世には法金剛院村に属していたが、明治7年(1874)に池上村と木辻村と合併して花園村となった。同30年(1897)には京都鉄道二条～嵯峨間が開通し、ここに花園駅が設置された。調査前までは駐車場として使用されていた。平安京の条坊では右京一条四坊十三町に該当し、調査地西側は西京極大路である。双ヶ丘南東麓は古来より景勝の地であり、平安時代初期、貴族達が山荘を営み、天皇の狩猟地ともなっていた。調査地の西側、五位山の麓には右大臣清原夏野(782～837)が山荘を営¹⁾んだ。夏野の没後、寺に改められ、土地にち



図1 調査前全景(東から)



図2 作業風景

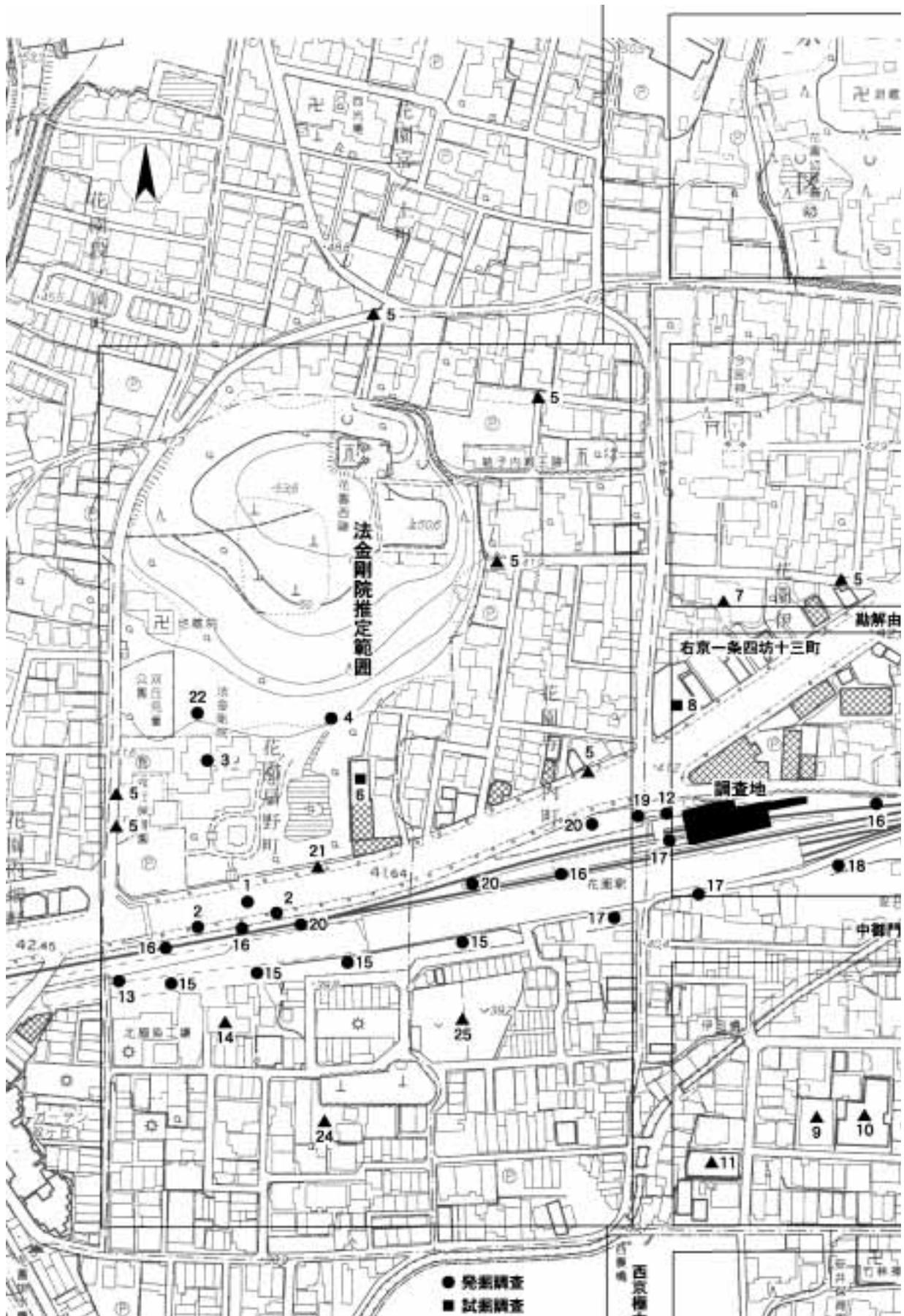


図3 調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺の主要な調査一覧表

番号	調査年度	調査法	調査期間	調査概要	文 献
1	1968 (1次)	発掘	1968.8.5 ～9.10	京都府教育庁文化財保護課による調査。平安時代の建築遺構、南北築地、園池の西汀線を検出。	「法金剛院発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1969年、「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1970年
2	1968 (2次)	発掘	1969.1.29 ～2.24	1次調査の続きとなる建築遺構、南北築地を検出。	同上
3	1968 (3次)	発掘	1969.3.6 ～3.31	園池の西汀線を検出。	同上
4	1970	発掘	1970	庭園文化研究所による調査。法金剛院境内で青女の瀧の瀧石組と水受石、遣水を検出。調査後、復元・整備された。	京都の庭園 遺跡にみる平安時代の庭園 『京都市文化財ブックス第5集』京都市文化観光局文化財保護課 1990年
5	1984	立会	1984.5.8 ～1985.6.27	下水道管敷設に伴う広域立会調査の一部。平安時代の溝、土壌、井戸などの遺構を検出。	「平安京右京北辺四坊・一条四坊、法金剛院、四円寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年、『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
6	1986	試掘	1986.9.30	平安時代後期～江戸時代の園池の東汀線を検出。護岸用の杭列、竹で上下四段交互に押さえたしがらみを巡らす。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
7	1986	立会	1986.11.5	勘解由小路の北側溝および路面、時期不明の土壌、柱穴を検出。	同上
8	1987	試掘	1987.8.31	平安時代末期～鎌倉時代の土壌、溝、落込を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
9	1988	立会	1988.8.22	平安時代後期の柱穴を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
10	1988	試掘	1988.9.12	鎌倉時代の土壌、小穴。室町時代の溝を検出。	同上
11	1989	立会	1989.8.1	鎌倉時代の土壌を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
12	1989	発掘	1990.3.13 ～4.2	平安時代後期の泥土と砂の堆積土層および南北方向の溝を検出。	「平安京右京一条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
13	1991	発掘	1991.6.11 ～11.6	1区で2m以上の盛土、下層に暗灰色泥土の堆積、3区で無差小路東側溝の痕跡を検出。	「平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
14	1994	立会	1994.9.8 ～9.12	平安時代後期の落込を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
15	1995 (1～5区)	発掘	1995.5.8 ～11.4	1・2区で湿地状堆積。5区で平安時代後期の礎石建物(三重塔)。園池の西汀線、南北溝などを検出。下層で平安時代中期の礎石建物を検出。	「法金剛院境内」『平成7年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
16	1996 (1次 1～8区)	発掘	1996.5.10 ～6.8	2区で南北溝、右京一条四坊十三町内の3区で平安時代後期の園池の東岸、法金剛院旧境内の6区で平安時代の整地層、南北溝、7区で平安時代の礎石掘付跡および礎石抜取穴を検出。8区で建物と中門(東御所)を検出。	「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
17	1996 (2次 1～3区)	発掘	1996.6.19 ～11.26	1区で平安時代後期の地業(東門)、2区で中御門大路北側溝、3区で西京極大路東側溝、東築地に伴う柱穴を検出。下層では11世紀以前の北東方向の流路、同方向の路面状遺構、竹などを検出。	同上
18	1996 (3次 1～3区)	発掘	1996.7.18 ～10.9	右京一条四坊十三町内で平安時代後期の園池の南岸を検出。下層では11世紀以前の北東方向の流路を検出。	同上
19	1996 (4次)	発掘	1996.9.2 ～9.27	平安時代後期の西京極大路路面、西側溝、法金剛院の東築地を検出。下層で11世紀の井戸、東西溝、柱穴を検出。	同上
20	1996 (5次 1～3区)	発掘	1996.11.5 ～1997.3.31	1区で平安時代後期の礎石建物、中門廊、中門、塀、遣水(東御所)、法金剛院東築地、西京極大路路面、西側溝、2区で平安時代後期の園池の東岸、3区で園池の西岸を検出。1区下層で平安時代中期の溝、建物、柵、3区下層で平安時代前期の地業を検出。	同上
21	1997	立会	1997.4.1 ～5.20	平安京から法金剛院境内を東西方向に横断した立会調査。池の東岸と西岸の中間で橋脚が置かれた中島と思われる整地層を検出。	同上
22	1997	発掘	1997.6.16 ～7.24	遺構は江戸時代末から明治時代以降の土取り穴跡であったが、平安時代前期の遺物が出土。	「法金剛院境内」『平成9年度 京都市埋蔵文化財概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
23	1999	立会	1999.8.27 ～8.30	無差小路西側溝を検出。	「平安京大路・小路の路面および側溝」『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
24	1999	立会	2000.1.21 ～1.28	平安時代後期の遺物を含む建物や築山の地業を検出。	「法金剛院境内」『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
25	2002	立会	2002.10.23 ～10.28	立会で時期不明の整地面。池の底部の可能性ある。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年

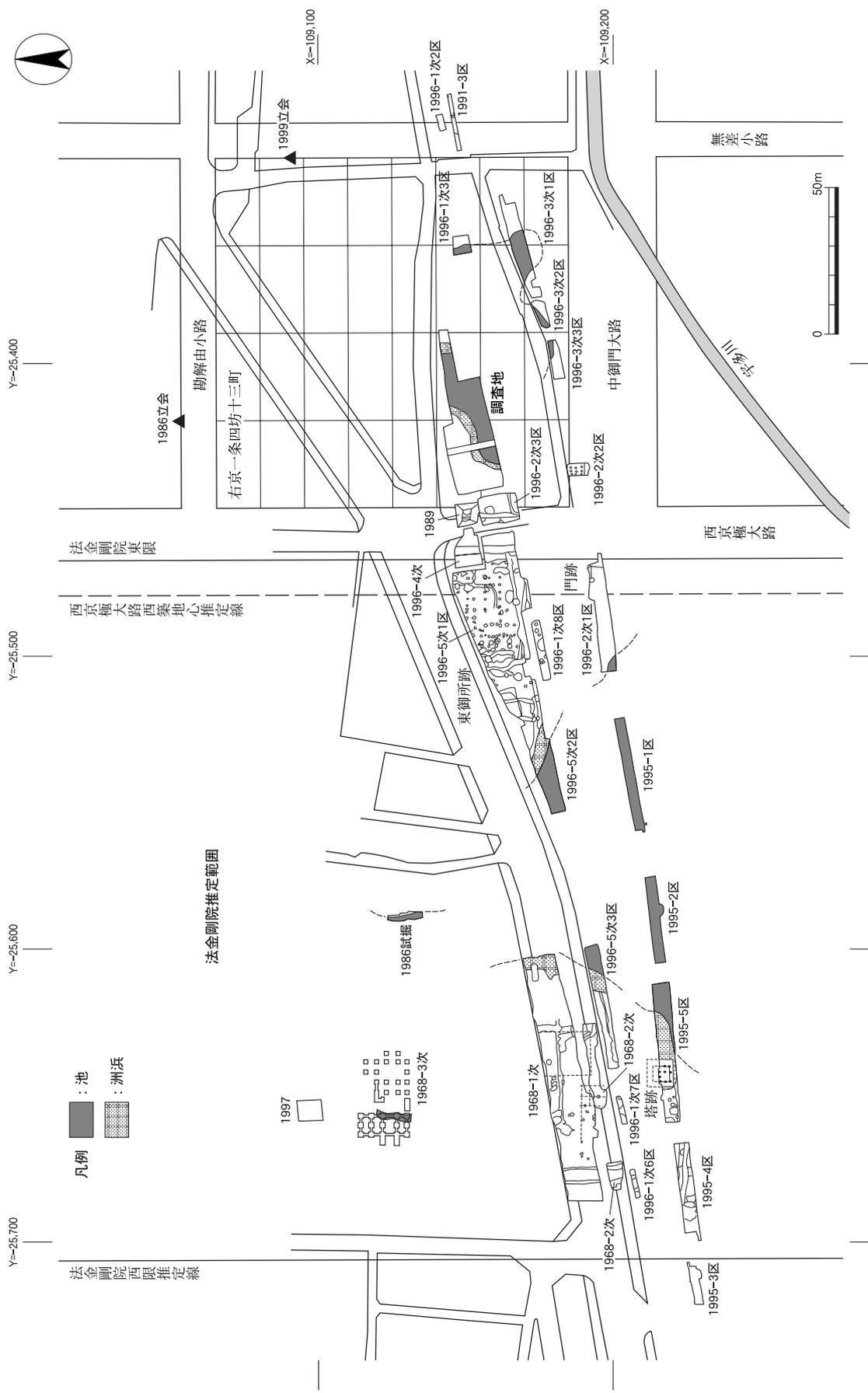


図4 周辺主要遺構配置図 (1 : 2,000)

なんで双丘寺と呼ばれたが、天安年中（857～859）には大寺院となっていたらしく、天安寺とも呼ばれている²⁾。寺は天延2年（974）に宝蔵が焼亡する。その天安寺跡地に大治5年（1130）、鳥羽天皇中宮待賢門院璋子（1101～1145）が仁和寺の子院の一つとして法金剛院を建立した³⁾。境内には中央に大池が掘られ、池の西には御堂、東には御所が造営された⁴⁾。続いて、三重塔や経蔵、北斗堂などの堂舎が造営され、上皇、天皇の行幸がしばしばあった。待賢門院の没後は娘の上西門院統子が入寺するが、上西門院崩御（1189）後は衰退する。法金剛院は弘安5年（1282）に円覚上人により再興され、退転を繰り返しながら現在まで法灯を伝えている。



図5 『中古京師内外地圖』に描かれた待賢門院仁和寺殿（一部調整）

調査地北側の右京一条四坊十四町には今宮神社が存在するが、ここは祇花園社または花園社とも呼ばれ、長和4年（1015）と永承7年（1052）に御霊会が行われている。その後は法金剛院および仁和寺の鎮守社となっている。その北東には籍田があったとされ、左大臣源有仁（1103～1147）は白河院からその土地を賜って山荘を営んでいる⁵⁾。南北朝期には妙心寺が創建されている。調査地南側、右京二条四坊には、応天門の変で失脚した伴善男の没官地一町があり、貞観17年（875）に天安寺に施入されたという記録⁶⁾がある。調査地を含む右京一条四坊十三町の状況を示す資料としては、18世紀前半に著された「正法山誌」⁷⁾の他、寛延3年（1750）森幸安によって描かれた絵図に、「待賢門院仁和寺殿」と記され、その南の町には池が描かれている⁸⁾。

（2）周辺の調査

図3・4と表1に示すように周辺の発掘調査事例としては、1968年度の丸太町通拡幅工事に伴う調査⁹⁾以来、数多くの調査が行われてきた。最近の主要な発掘調査事例としては、道路建設に伴う1989年度の平安京跡の調査¹⁰⁾で平安時代後期の南北溝を検出したことをはじめ、JR嵯峨野線の高架事業に伴う1995年度の調査¹¹⁾では、法金剛院推定範囲内で平安時代後期の湿地状堆積（1区・2区）、版築基壇を伴う礎石建物や園池（5区）を検出し、三重塔が池の西岸際に位置していたことを明らかにした。また1996年度の調査¹²⁾で、法金剛院推定範囲内で平安時代後期の門の地業（2次1区）、中門廊、中門、建物、遣水などに係わる遺構（5次1区）、園池（5次2区・3区）を検出し、東門と東御所の位置を明らかにした。平安京跡では、平安時代後期の西京極大路の路面や側溝（2次3区、4次、5次1区）を検出し、12世紀の西京極大路が『延喜式』記載の幅十丈より約半分に狭められていることを明らかにした。他にも中御門大路北側溝（2次2区）、平安時代後期の池の東岸（1次3区）、池の南岸（3次1区～3区）を検出している。また、下層では11世

紀以前の北東から南西方向への流路（2次2区・3区、3次2区・3区）を検出している。立会調査では勘解由小路の北側溝および路面¹³⁾、無差小路西側溝¹⁴⁾を検出している。

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要（図6～8）

調査地の層序は比較的単純である。調査区は近代の暗渠のコンクリート製擁壁で東西に分断されてはいたが、全体にわたり旧鉄道駅時代の盛土層が約1.2m、耕作土層が約0.2m、さらに古い耕作土層である暗褐色砂泥層が約0.3mの厚さで堆積していた。その下層で北東から南西にかけて、平安時代後期から鎌倉時代の池の岸を約22mにわたって検出した。この池は1996年度の調査で検出した池岸に対応する北西岸と思われる。池岸部の堆積状況は図6～8に示したように、礫敷の洲浜層（第1層）が最も厚い部分で0.3m、次に砂敷の洲浜層（第2層）とその地業が最も厚い部分で0.3mあった。それぞれに対応する池の堆積土も2層（黒褐色泥土層約0.1m、黒色粘質泥土層約0.1m）あり、この池は少なくとも2回、園池として整備されたことがわかる。陸部には黒色粘質土層に代表される平安時代後期の整地層（第3層）が約0.2～0.7mの厚さで数層あり、その上面には礫が2～3cmの厚さで敷かれていた。それより下は旧流路の堆積層と認められる砂礫層があった。拡張区では南北方向で西側に落ちる池岸を検出した。池部の基本層序は本調査区と同様であったが、洲浜部では砂層の下に粘質土はみられなかった。陸部は灰色粘質土で整地されていた。

調査は第1面から第4面の4段階に分け実施した。第1層の上面を第1面、第2層の上面を第2面、第3層の上面を第3面、地山直上を第4面とした。第1面は洲浜に礫を敷いて汀を形成した新期の池を含む園池、第2面は洲浜に砂を敷いて汀を形成した古期の池を含む園池、第3面は平安時代後期の整地層、第4面は平安時代後期の旧流路の検出面となる。なお、平安時代をさかのぼる時期の遺構は検出していない。

各検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都Ⅰ期からⅩⅣ期の編年案を準用する¹⁵⁾。

(2) 第1面の遺構（図版1）

調査区の北東から南西にかけて緩いS字状の汀線を持つ池（新期の池）を検出した。この池は

表2 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代後期	旧流路、整地層、土壙、柱穴、園池
平安時代末期～鎌倉時代初頭	園池



図6 南壁断面図 (1 : 50)

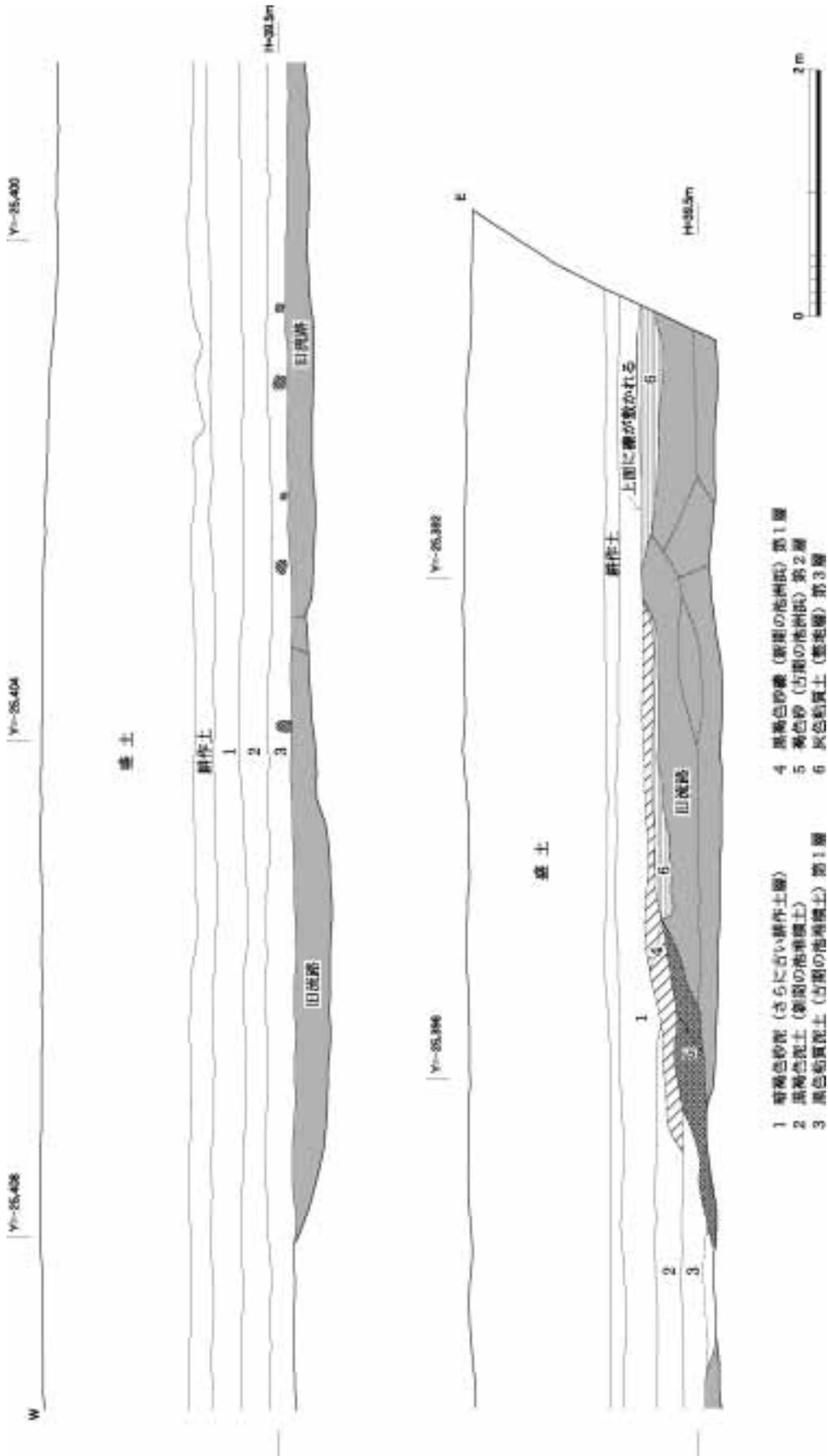


図8 拡張区北壁断面図 (1 : 50)

法面全体に5～6cm大の礫が敷き詰められており、黒色系の粘質土で固定されていた。礫敷の幅は広いところで2.4m、狭いところで0.6mである。南へ湾曲する部分の汀には幅1.5mの帯状の範囲に集中的にこぶし大の礫が敷き詰められていた。汀の勾配は10～14度であった。調査区南端に入り込む汀部で小振りの景石2石（ホルンフェルス・黒雲母花崗岩）が別個に頭頂部を覗かせていた。他に景石は見られず、抜取穴も見られない。調査区北東部および拡張区では2～3cmの小礫が汀に薄く敷かれていた。汀部および池の堆積土から出土する遺物はV期中～新段階（12世紀後半）のものが主であるが、VI期古段階（13世紀初頭）の遺物も散在しており、その間の時期に園池として機能していたものと考えられる。これより上層は、調査区全面は暗褐色砂泥で覆われていた。室町時代から近世までの時期の遺物の小片が含まれており、その上層の旧耕作土より、さらに古い耕作土とした。

（3）第2面の遺構（図版2）

新期の池の下層で池（古期の池）を検出した。造営された当初の姿と考えられる。汀線は緩い曲線で、汀の勾配は9～10度である。洲浜の汀部は大部分にわたって礫を含む黒色あるいは褐灰色の粘質土によって地業が施され、その上に細かい砂を厚く敷いて仕上げていた。砂層は最も厚いところで10cmあった。調査区の北東部では幅2m以上にわたって褐色砂で砂洲状に形成されて、中央部ではにぶい黄褐色砂が敷かれ上面にこぶし大の礫がまばらに配されていた。池が北西部から南へ湾曲する部分では池の肩部から底部にかけて、にぶい黄褐色砂を敷き詰めていた。なお、景石は認められなかった。池底の状況は、こぶし大の礫を含め、全体に2～3cmの礫がまんべんに敷き詰められていた。調査区北東部では、池底の汀寄りの幅0.5～6.0mの範囲に、長径10～15cm、短径5～8cmの緑色片岩が散在する状況を検出した。また、粘質土による漏水防止措置はなく、敷き詰められた礫と礫の隙間から今も湧水があった。池底から洲浜上面までの標高差は約0.3mである。園池陸部には2～3cmの小礫が薄く敷かれていた。

池底の礫面や汀の砂層からV期中段階（12世紀前半）の遺物が出土した。特に汀の砂層から土師器皿の出土が多かった。

拡張区では、北東から南西方向に灰黄褐色砂が敷かれた洲浜を検出した。この部分は池全体の状況からみて東西方向の岸から南へ張り出している半島の一部かと思われる。

なお、この調査区内では、池の給・排水路にかかわる遺構は検出できなかった。

（4）第3面の遺構（図版3）

調査区西部で園池陸部に薄く敷かれた小礫の下層は黒色粘質土による整地層であった。その整地層を切って柱穴を29基、土壙を2基検出した。柱穴の規模は掘形0.4～0.5m、柱当たり0.18～0.2m前後、深さは0.1～0.3m、最も深いもので0.52mあった。南北に並ぶ列が3種ある。西接する調査（1996年度2次3区）では平安時代後期の整地面で柱穴を23基検出しており、検討してみたところ、柱筋の合うものはあるが、建物としての復元には至らなかった。図版3では両調査の

遺構図を合わせて掲載した。柱穴から出土した遺物は小片であったがV期古段階（11世紀末期～12世紀初頭）に属する土器であった。土壌28からはV期古段階に属する土器がまとまって出土した。少量ではあったが整地層から出土する遺物もV期古段階のものであった。

（5）第4面の遺構（図版4）

第3面整地層の直下には砂礫が堆積した流路が北東から南西方向に幾筋もはしり、整地以前にこの付近一帯には自然流路があったことが判明した。拡張区でも陸部の灰色粘質土からなる整地層と池の堆積土層の下は砂礫層による流路となっている。個々の流路幅は4.5～6.0m、深さ0.5～1.0mであり、最低限8筋あった。流路全体の幅は55m以上となる。Ⅲ期（10世紀）の土師器が整地層直下から出土しており、当地はそれ以降に整地されたと考える。遺物は他には流木が1片であった。ところで西接する調査（1996年度2次3区）では、下層遺構として11世紀以前の北東方向の流路、流路と同方向の路面状遺構、根起こしされた竹などを検出している。岸辺の様相を示すことから、今回の調査区で検出した自然流路の西限にあたるのではないかと考える。これに対応する東の岸辺は今のところ不明である。

4. 遺物

（1）遺物の概要

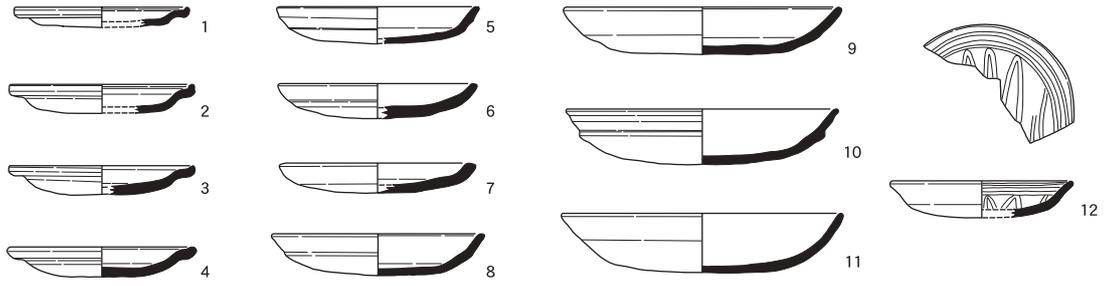
出土遺物は土器が大部分を占める。そのほとんどが平安時代後期から鎌倉時代初頭に納まるが、平安時代前期・中期に属する破片が少量混入していた。大部分は池の汀部分から出土した。旧流路の堆積土からは土師器の小片を検出した。第3面の土壌28からは相当数の遺物が出土した。中

表3 遺物概要表

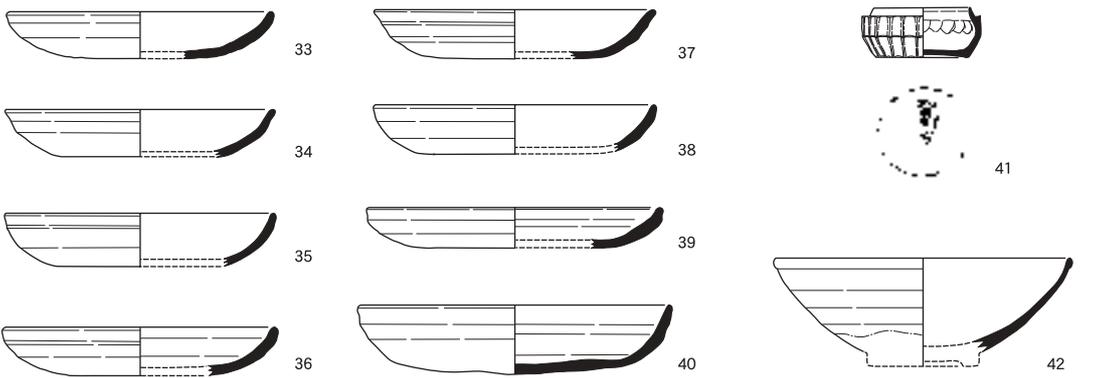
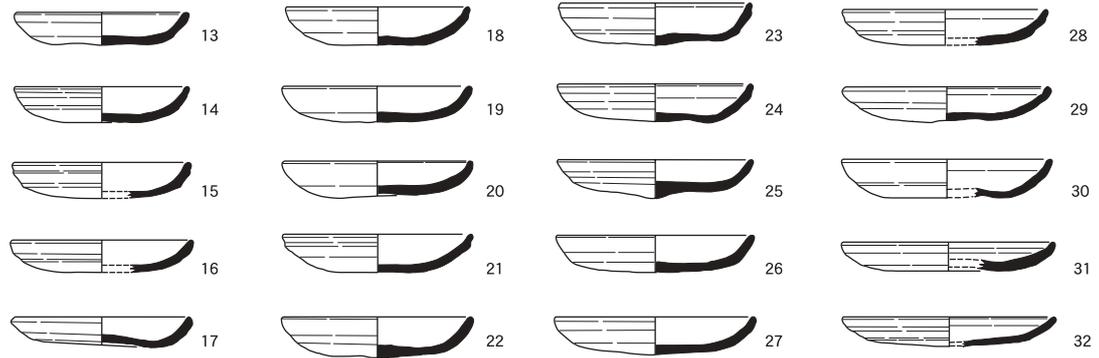
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石鏃		石鏃1点	0箱	0箱
平安時代後期～鎌倉時代初頭	土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器、山茶椀、焼締陶器、滑石羽釜、埴、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、柱根、緑色片岩、泥岩製砥石	24箱	土師器49点、須恵器1点、瓦器1点、輸入磁器2点、滑石羽釜1点、軒丸瓦11点、軒平瓦4点、平瓦1点、緑色片岩6点	1箱	19箱
室町時代	土師器、瓦器、輸入磁器、銭貨	4箱		少量	4箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、染付	3箱		0箱	3箱
合計		31箱	77点（4箱）	1箱	26箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

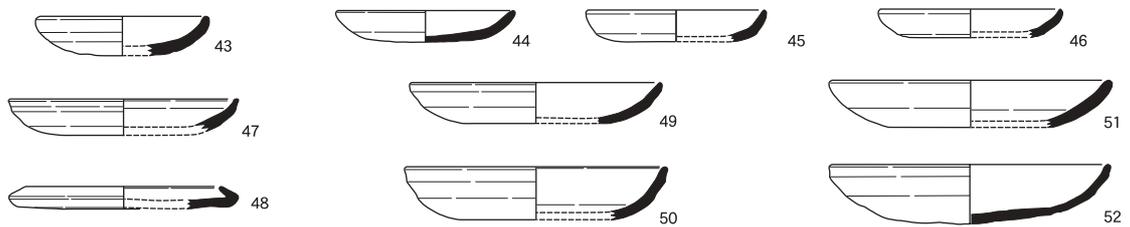
土壙28



古期の池



新期の池



園池陸部

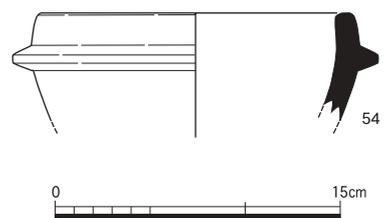


図9 出土遺物実測図(1:4)

世から近世に属する遺物は少ないが、耕作土層とさらに古い耕作土層から出土した。なお、調査開始時の重機掘削中に縄文時代の石鏃が出土した。

(2) 土器類

旧流路

拡張区東端の灰色粘質整地層の直下の旧流路堆積土上層から平安時代中期の土師器皿の底部が1片出土した。薄手で磨滅している。

整地層

整地層からは土師器皿の破片が少量出土した。V期古段階に属する。

土壙28 (図9、図版12 1~12)

第3面の土壙28から土師器皿(1~11)、瓦器皿(12)が出土した。

土師器皿には口径9.2~10.0cm、器高1.1~2.0cmで、口縁部を強く屈曲させ、口縁端部をつまみ上げた小型皿(1~4)と、口径10.2~11.2cm、器高1.6~2.2cmで、器壁がやや厚く口縁端部の一部に平坦面を持つ小型皿(5~8)がある。5・6・8は口縁部外面の横方向のナデによる二段の凹みが見て取れるが7は不明瞭である。口径14.4~14.8cm、器高2.5~3.0cmの大型皿(9~11)では、口縁部外面のナデは一段で口縁端部を丸くおさめる9・11と、ナデによる二段の凹みを持ち口縁端部は外反気味の10がある。

瓦器皿(12)は口径9.6cm、器高2.0cmで内面に暗文を施す。いずれもV期古段階に属する。

古期の池 (図9、図版12・13 13~42)

第2面の古期の池からは土師器(13~40)、青白磁(41)、白磁(42)の他に須恵器甕や山茶椀などが出土した。大半が土師器で他はわずかである。特に洲浜を形成する砂層から多量の土師器皿の出土をみたが、破片が多く、わずか7個体(17・20~22・24・25・40)が完形であった。

土師器小型皿(13~32)の中では、14~16・18・21・23・24・27・28・31・32は、体部上部から口縁部外面に横方向のナデによる浅い二段の凹みを持ち、口縁部上部から端部が斜め上方へ立ち上がる。特に21・24・28・31・32は二段ナデを顕著に残している。13・17・22・25・26・29は二段ナデの痕跡があり、口縁端部を丸くおさめる。19・30は口縁部外面のナデは一段で、口縁端部は丸くおさめる。20はナデは一段で口縁端部に平坦面を持ち一部内外面に煤が付着する。小型皿は口径9.2~11.3cm、器高1.6~2.2cmの中におさまる。口径14.0~15.6cm、器高2.1~2.8cmの中におさまる土師器大型皿(33~39)はすべて口縁部外面は二段ナデである。33・39は口縁端部が斜め上方へ立ち上がる。34は外反気味である。35・36・38は丸くおさめる。37は二段ナデの痕跡が顕著で口縁端部が外反している。茶褐色を呈する漆が内外とも全面に付着していた。40は二段ナデが明瞭で口縁端部は斜め上方へ立ち上がる。口径16.5cm、器高3.6cmを測る。いずれの土師器もV期中段階に属するが、37は少し古い様相を持つ。青白磁合子の身(41)は外面には花弁状の陰刻を施し、内面は施釉しない。外部底面には陽刻状のものがあるが、文字としては判読できなかった。他には白磁椀(42)がある。玉縁状の口縁を持ち、体部下半は露胎である。

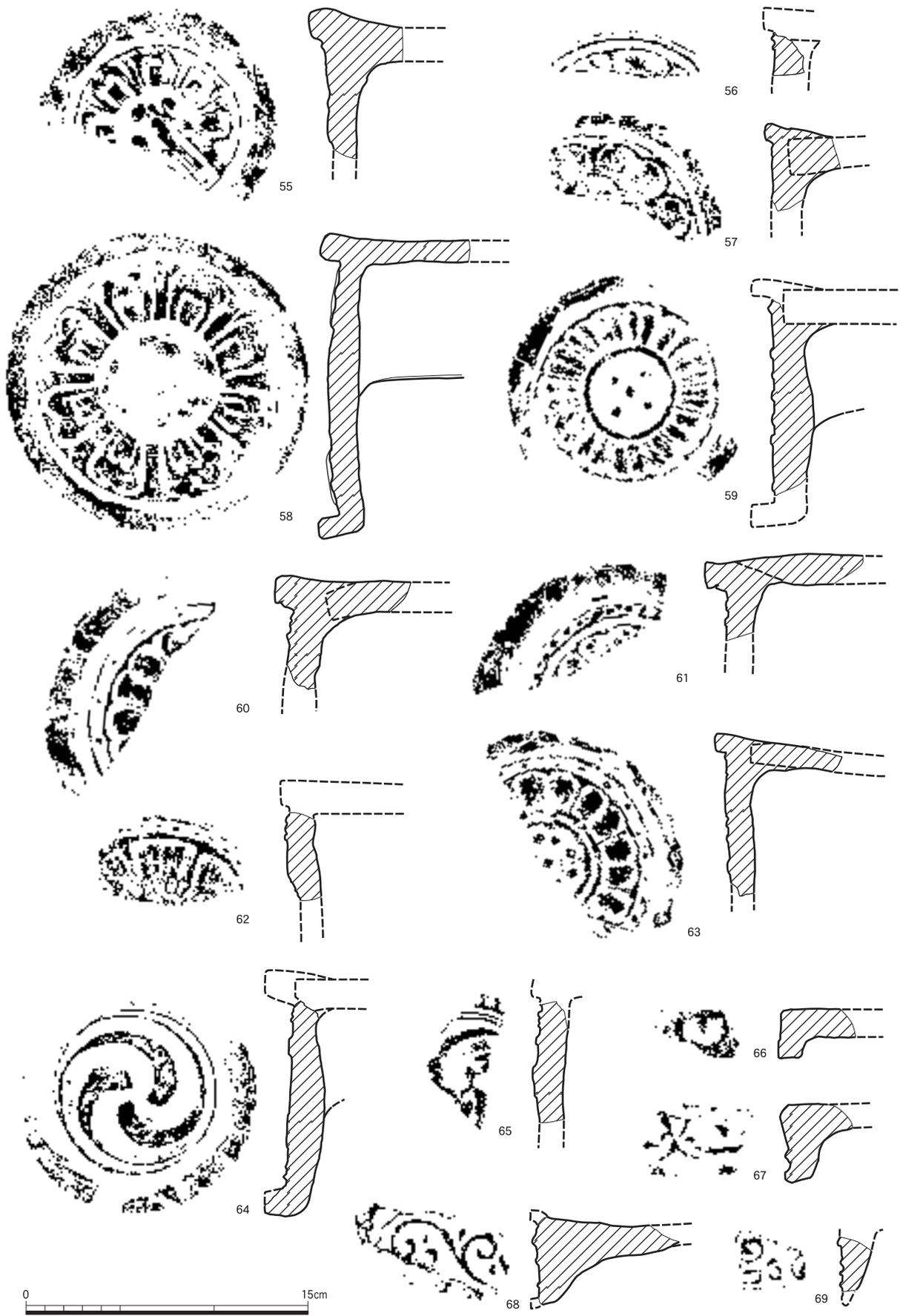


图10 出土軒瓦拓影·实测图 (1 : 3)

28・34は汀を形成する砂の下に施された地業の褐灰色粘質土から、13・35・37～39・42は池底の礫敷面から、32・33は池の堆積土から、その他はすべて汀を形成する砂からの出土である。他には須恵器甕や山茶椀などが出土したが、いずれも小片であった。緑釉陶器や灰釉陶器の小破片もあるが混入と思われる。

新期の池（図9、図版12・13 43～53）

第1面の新期の池からは土師器小型皿（43～47）、コースター型皿（48）、土師器大型皿（49～52）、須恵器鉢（53）などが出土した。これらはすべて汀を形成する礫敷からの出土である。池の堆積土からは遺物の出土は少なかった。

43は体部上部から口縁部外面にナデを二段認めるが、44～46は段差が不明瞭である。45には口縁部に煤が付着している。これらはいずれも厚手感があり、口縁端部は外反していない。口径9.1～9.6cm、器高1.5～2.0cmにおさまる。口径12.0cm、器高1.9cmを測る47は外面のナデによる二段の凹みが明瞭で、口縁端部は外反気味である。口径12.0cm、器高1.2cmのコースター型皿48は円板状の底部から口縁端部が内方へ折り曲げられた形状である。底部周縁部にもナデが及んでいる。底部には指圧痕がある。口径13.2～14.8cm、器高2.1～3.1cmの大型皿（49～52）では、49・50は体部上部から口縁部外面に浅い二段のナデがあり、口縁端部は丸くおさめる。51は器壁は厚手、ナデは一段で口縁部が緩やかに立ち上がる。52は口縁部外面の二段ナデが顕著で口縁部は立ち上がり、端部は丸くおさめる。

53は東播磨産の須恵器鉢である。体部内面にロクロ痕が残る。体部外面には丁寧なナデがあるが、一部、ななめ方向に掻き上げる櫛目の痕がある。口縁は上端部と外端部を肥厚気味に丸くおさめられた三角形状を呈している。

これらの土器群はV期中～新段階に属する。他には須恵器甕・鉢、白磁があるが小破片である。また少量であるがVI期古段階の土師器の小片があった。

暗褐色砂泥層

暗褐色砂泥層（さらに古い耕作土層）からは室町時代の土師器や瓦質土器、白磁、青磁の小破片がわずかに出土している。

（3）その他の出土遺物

その他の出土遺物には瓦・石製品・銭貨・植物遺体などがある。

瓦（図10～12、図版14 55～70）

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、時代別ではほとんどが平安時代後期である。軒瓦は軒丸瓦が16点と軒平瓦が5点で、軒丸瓦には蓮華文9種13点（55～63）と巴文3種3点（64・65）、軒平瓦には剣頭文1種1点（66）、唐草文4種4点（67～69）であった。出土軒瓦の同範関係については同文様を呈するもののうち、実見して照合したものについてのみ同範とし、実見できなかったものについては同文とした。

55は単弁8葉蓮華文軒丸瓦で中房がやや盛り上がり、蓮子は1+5。蓮弁は方形で子葉がある。

間弁は凸線であらわす。胎土は細かい砂粒を含むが緻密、色調は黒灰色で焼成は軟質である。製作技法は、瓦当部裏面上部に丸瓦を当て粘土を付加して接合している。同範の瓦が他に1点出土した。同文例は法金剛院（1995年度5区¹⁶⁾、右京一条四坊十四町¹⁷⁾、仁和寺¹⁸⁾、平安宮内膳司跡¹⁹⁾などがある。

56は単弁蓮華文軒丸瓦で蓮弁は凸線であらわす。胎土は精良で暗灰色を呈し焼成は硬質である。

57は複弁蓮華文軒丸瓦で中房を欠く。蓮弁は互いに接し、子葉がわずかに盛り上がる。胎土は精良で灰白色を呈し焼成は軟質である。製作技法は、瓦当部裏面上端に溝を付け、丸瓦を挿入し粘土を付加して接合している。

58は複弁8葉蓮華文軒丸瓦で蓮弁は盛り上がり、子葉がある。間弁はバチ状。蓮子は1+6。瓦当表面に離れ砂が付着する。胎土は精良で黒灰色を呈し焼成は硬質である。瓦当部の製作技法は55と同様である。同範の瓦が他に2点出土した。同文例では法金剛院（1968年度・1996年度5次1区²¹⁾）の他、尊勝寺跡²²⁾・²³⁾や法勝寺跡²⁴⁾にある。

59は複弁13葉蓮華文軒丸瓦で複弁のひとつには分割線を入れて単弁にしている。凹型中房で圏線が巡り、蓮子は1+4。胎土には微砂を含み、淡青灰色を呈し焼成は硬質である。瓦当部の製作技法は55と同様である。同文例が最勝寺跡²⁵⁾にある。

60は複弁蓮華文軒丸瓦で蓮弁は互いに接する。子葉は少し盛り上がり、中房は欠損している。外区には珠文が規則正しく巡る。胎土には砂粒を含み、淡黄灰色を呈しているが表面は暗黒灰色で焼成は軟質である。瓦当部の製作技法は55と同様である。

61は単弁蓮華文軒丸瓦で中房は欠損している。蓮弁は互いに接し、子葉は盛り上がる。外区は小粒の珠文が密に巡る。離れ砂を使用している。胎土は砂粒を含む灰色で焼成は硬質である。瓦当部の製作技法は55と同様である。同文例が法勝寺跡²⁶⁾にある。

62は複弁蓮華文軒丸瓦で蓮弁は互いに接し、子葉は盛り上がらない。中房の廻りに蕊帯が巡る。外区には小粒の珠文が密に巡る。胎土は精良、暗灰色を呈し焼成は硬質である。

63は複弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は互いに接し子葉は盛り上がる。凹型中房で圏線が巡り、蓮子は1+8。外区には小粒の珠文が密に巡る。胎土には微粒子の砂を含み、淡黄灰色を呈し焼成は軟質である。瓦当部の制作技法は55と同様である。同範と見られる瓦が他に1点出土した。同文例が尊勝寺跡²⁷⁾、最勝寺跡²⁸⁾、法勝寺跡²⁹⁾にある。

64は右巻き三巴文軒丸瓦である。頭部は離れ、尾部は互いに接し、界線となる。胎土は精良で暗灰色を呈し焼成は硬質。製作技法は57と同様である。

65は左巻き三巴文軒丸瓦である。頭部は中心で連結し、尾部は長く、界線を作る。外区にある珠文は凹んだ形状となっている。瓦当面には灰白色を呈する釉薬の痕跡があり、また、裏面には指圧痕を残す。胎土は緻密で赤銅色、焼成は非常に硬い。

66は剣頭文軒平瓦で瓦当部凹面にタテ方向に二条が1mm幅で並走するヘラ描をもつ（図11）。胎土は緻密で黒色を呈し、焼成は軟質。折曲げ技法である。

67は唐草文軒平瓦で胎土には白色の砂粒を含むが表面にはいぶしがかかり、黒色を呈する。焼

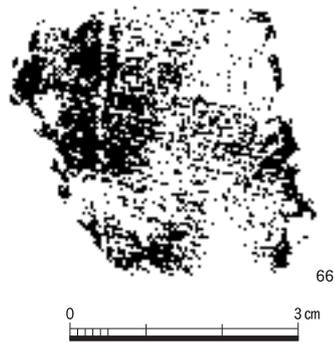


図11 ヘラ描をもつ軒平瓦拓影 (1 : 1)

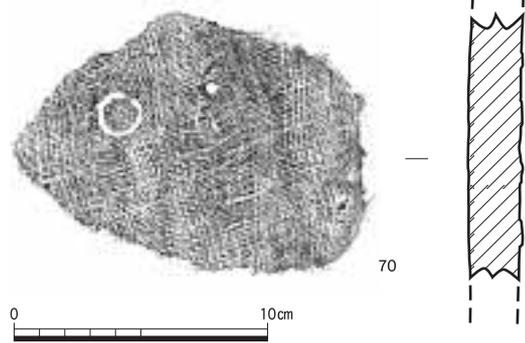


図12 刻印のある平瓦拓影・実測図 (1 : 3)

成は軟質。布目が瓦当面全面に認められ折曲げ技法である。同文と考えられる例が法金剛院(1996年度5次1区)³⁰⁾にある。

68は唐草文軒平瓦で子葉は強く巻き込む。胎土は緻密で淡黄灰色を呈し、焼成は軟質。瓦当部成形は包み込み技法である。

69は唐草文軒平瓦で胎土は精良、灰色を呈し、焼成は軟質である。同文と考えられる例は平安宮跡³¹⁾、尊勝寺跡^{32)・33)}、法勝寺跡³⁴⁾、鳥羽離宮南殿跡³⁵⁾で出土している。

出土遺構は新期の池礫敷洲浜部分が4点(55・58・69)、古期の池砂敷洲浜部分が5点(59～61・68)、古期の池地業が1点(63)、古期の池堆積土が3点(56)、陸部掘下げ中が5点(62・65～67)、清掃中が3点(57・64)である。軒瓦の産地は播磨産が16点(56～64・68・69)、山城産が4点(55・66・67)、65は同範、同文例を見いだせなかったが、胎土、焼成の状況から尾張産³⁶⁾と思われる。

平瓦(70)はC型刻印を持つ(図12)。凸面は格子状のタタキである。

他には池底の礫敷から出土した埴が1点ある。浅黄橙色を呈しており、非常にもろく、火を受けたと思われる。

石製品(図9・13、図版13 54・71～77)

園池の陸部にあたる部分から滑石製羽釜(54)の小片が出土した。鏝の断面は正台形で、12世紀後半に属する³⁷⁾。

また、調査開始時の重機掘削中に縄文時代のサヌカイト製の石鎌(71)を検出した。全長2.9cm、鎌身部最大幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.44gを測る。遺構からではなく近代H鋼埋設時の掘削からの出土である。

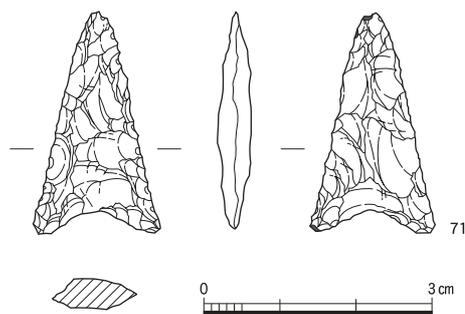


図13 石器実測図 (1 : 1)

第3面の黒色粘質土の整地層面から泥岩製砥石が出土した。変形立方体で長軸長18.0cm、短軸長15.0cm、最大厚15.0cm、重さ8.4kgである。全面が平坦面を有するが、使用面は2面である。

その他、池底の汀寄りで、散在する緑色片岩を

6点(72~77)検出した。この中には研磨したように平滑な切断面を持つものがあった(76・77)。その切断面には、ほぼ平行な筋状の痕跡が残り、76では2~3mmほどの切り幅が確認できることから、石挽き鋸により切断したとみられる。緑色片岩は、緑泥岩や緑簾岩を含む結晶片岩の一種で、細かく平行に走る片理が水に濡れると濃い緑色を呈する美しい岩石である。産地は紀ノ川流域または吉野川流域である。

錢貨

陸部北側の暗褐色砂泥層(さらに古い耕作土層)から皇宋通寶と元祐通寶各1枚が重なって出土している。周辺での錢貨の出土状況では、1996年調査5次1区で室町時代の柱穴から地鎮の際に埋納されたとみられる20枚を一緡にした皇宋通寶などの銅錢が出土している。

植物遺体

桃の種が新期の池の汀部および堆積土から各1個体と、古期の池の汀部砂層から2個体、計4個体が出土した。他には柱穴45には柱根が残っていた。旧流路からは流木が1片出土した。

5. ま と め

(1) 遺構の変遷

今回の調査では、平安時代の園池を中心として4面の遺構面を検出した。これらの関係を以下に整理してまとめる。

調査地の第4面で砂礫が堆積した流路を検出し、この付近一帯には自然流路が北東から南西方向に幾度も流れを変えてはしっていたことが判明した。西接する調査(1996年度2次3区)で11世紀以前の北東方向の流路、流路と同方向の路面状遺構、根起こしされた竹などを検出、西の岸辺に相当することから、今回の調査区で検出した自然流路の西限がわかった。この流路からは10世紀代の土師器の小片が出土し、直上の整地層から11世紀末期から12世紀初頭の遺物が出土しているため、その頃もしくはその直前に埋められたと思われる。

第3面の遺構では整地層を検出している。流路に堆積した砂礫層や砂層という軟弱な地盤であるので粘質土を使うことで対応したとみられる。その整地層を切って土壇と柱穴を検出した。整地層および土壇・柱穴から出土した遺物は11世紀末期から12世紀初頭で整地層と遺構との時間差はあまりない。土器の年代観からすれば、十三町内では、11世紀末期以降、法金剛院建立以前に、流路の埋め立て工事があったと考えられる。図14では大正時代の地形図に平安京の条坊を重ね合わせたものであるが、宇多川が右京一条四坊六町にさしかかると十一・十二町を避けるように南流し、十二・十三町の南からは流れを西に変えている。本来は北東から南西方向に流れていたものと思われる河川を東へ移動させたと考えられるのではないだろうか。

第2面の古期の池は12世紀前半から中頃に成立している。周辺調査の成果と合わせると、その池は右京一条四坊十三町内のほぼ南半部を占めていることから1町の規模を有する邸宅の園池部

分と考える。この時期は西側に隣接する法金剛院の造営から施設拡充時期と一致する。すなわち、大治5年(1130)の堂舎建立の後、長承4年(1135)に北斗堂と東新御所、保延2年(1136)に西御堂の南に三重塔、経蔵が造営³⁹⁾される。保延3年(1137)、同4年には競馬が行われ⁴⁰⁾、保延5年(1139)の3月に南御堂が⁴¹⁾、11月に三昧堂が完成し、伽藍を整えていくのである。久安元年(1145)、待賢門院は三条高倉第にて崩御、法金剛院に葬送⁴³⁾された。

第1面の新期の池は12世紀半ばに改修され13世紀初頭まで園池として機能していたものと考えられる。法金剛院関係史料をみると、待賢門院崩御後、子息の紫金台寺御室覚性法親王に譲られるが⁴⁴⁾、保元3年(1158)には娘の上西門院の御所となっていたらしく、上西門院が方違するのは法金剛院の修理のためかとする記事がある。仁安3年(1168)には後白河上皇の御幸⁴⁶⁾があり、承安元年(1171)に上西門院は東御堂を建立⁴⁷⁾し、後白河法皇と建春門院の御幸がある。治承5年(1181)に法金剛院御所が火事という記事がある。文治5年(1189)、上西門院は崩じ、法金剛院に葬送⁴⁹⁾される。しかしこの後、法金剛院を皇族が使用する記事はみえなくなり、新期の池はこの

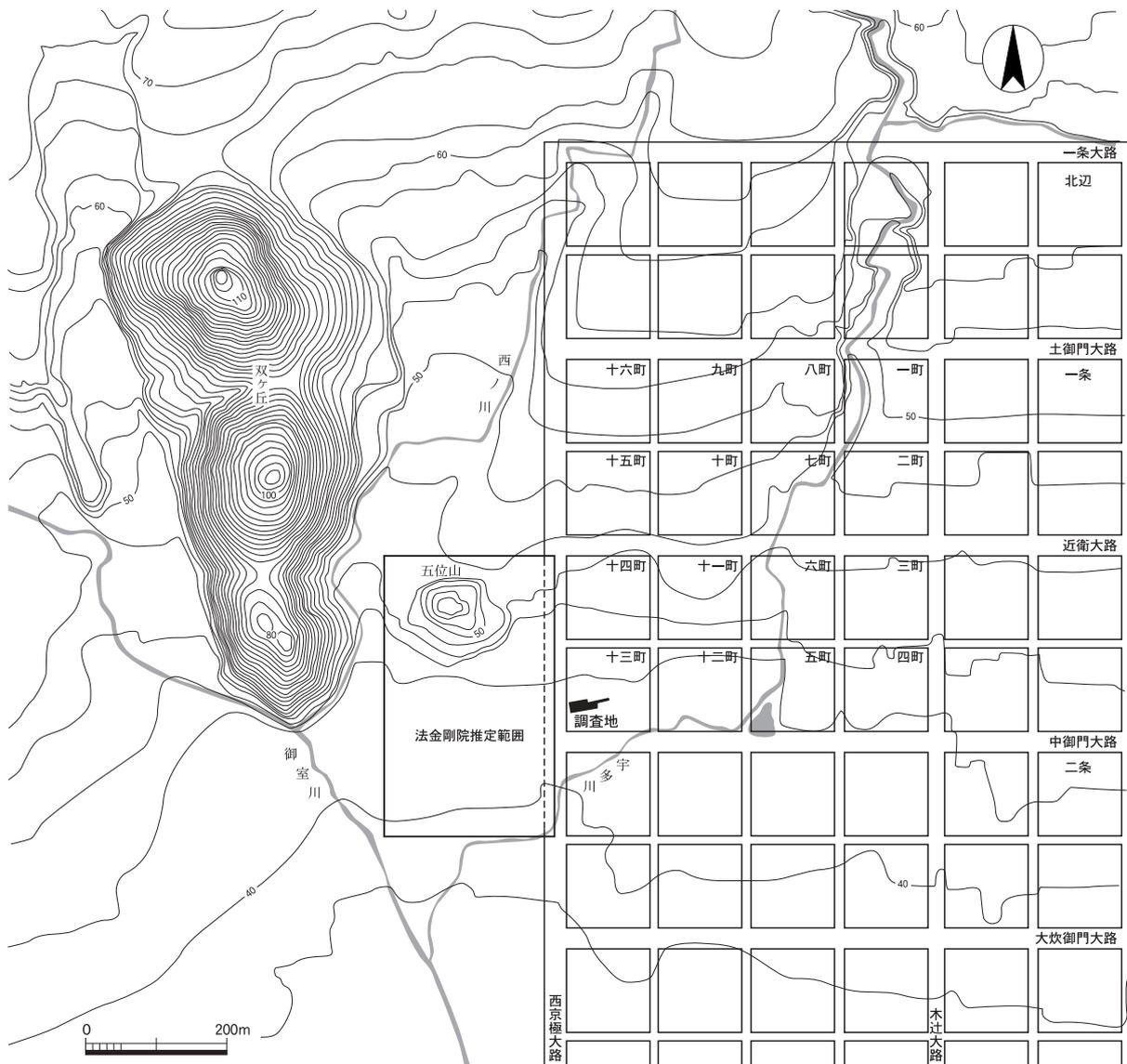


図14 調査地周辺地形図 (1 : 10,000)

盛衰と時を同じくしているといえる。園池遺構の上面は2層に分かれる耕作土で覆われていたことから、園池廃絶後は耕作地となって近代まで続いたようである。

以上のことから、調査地では、11世紀末期から12世紀初頭に旧流路を改修し、埋め立てて土地が整備され、法金剛院造営に伴って1町の南半部を占める園池が造られたことが明らかとなった。

(2) 園池

調査で検出した園池は、平安時代後期から鎌倉時代初頭まで機能していた。ここではその成果をまとめる。

a. 園池の規模について

図15に示すように、周辺調査の成果と合わせると今回の調査によって出土した池は東西約80m

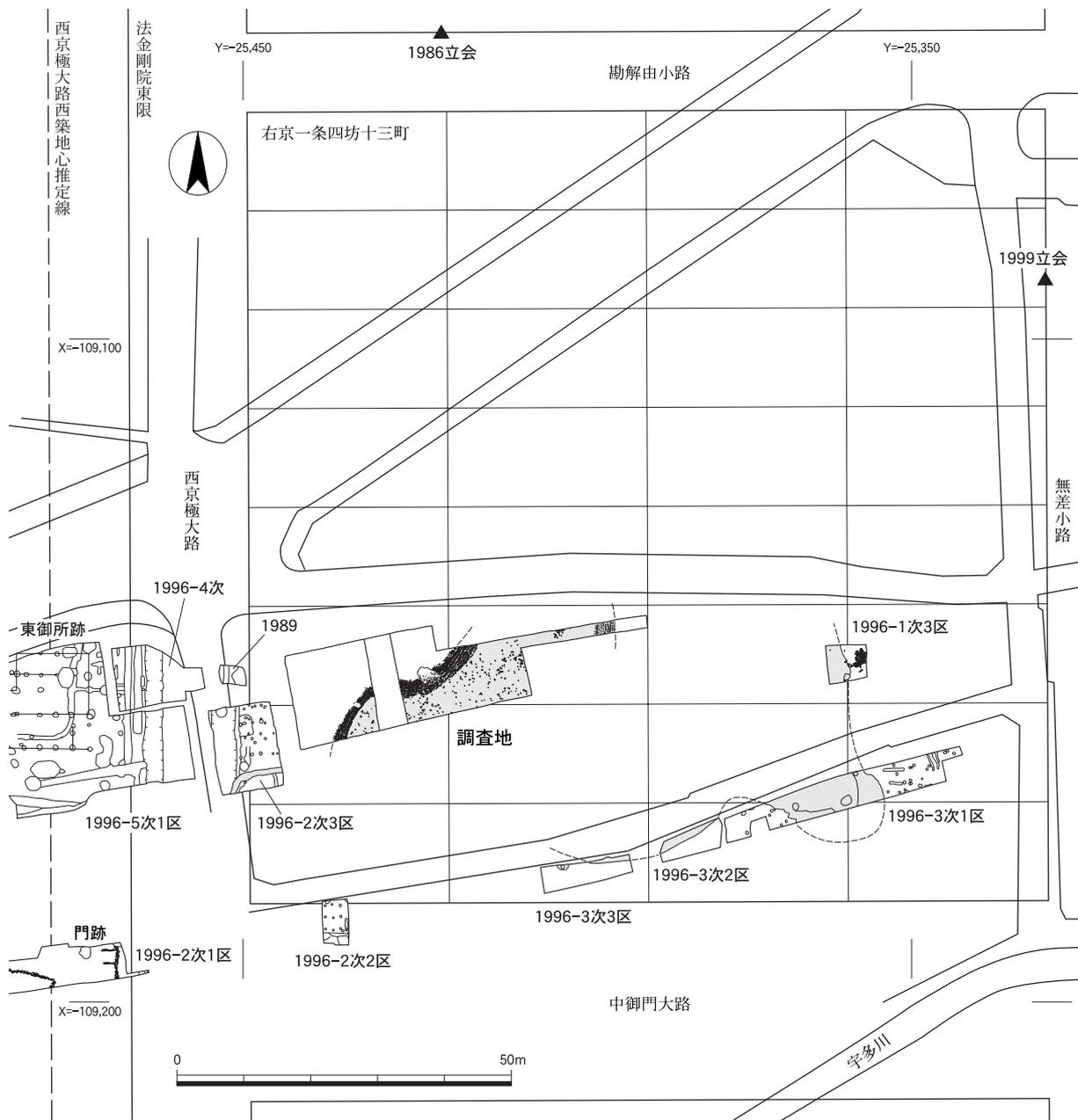


図15 右京一条四坊十三町周辺遺構平面図 (1 : 1,000)

以上、南北40m以上、調査区の範囲内では深さ約20～30cmの規模であることがわかった。また、右京一条四坊十三町内のほぼ南半部を占めていることから、1町の規模を有する邸宅の園池部分と考えることができる。北東部には遺水の存在も考えられる。

b. 汀の意匠について

園池として造営された当初の姿と考える古期の池は、汀の勾配は約10度と緩やかであり、洲浜部分は粘質土でしっかり固められた上に砂が厚く敷かれていた。景石は認められない。このように砂で汀を作る技法や非常に緩やかな勾配をもつ汀の意匠は、法金剛院旧境内で発見した園池（1995年度5区、1996年度5次2区・3区）ときわめて類似している。なお、平安時代の庭園遺構の中で、砂で汀を作る園池を持つ例は、平安京内では初めての発見である。

新期の池は洲浜に礫を敷いた造りで、汀には5～6cm大の礫が粘質土上に固定されていた。汀の勾配は緩やかに仕上げられており、小振りの景石があった。

c. 給排水について

この池の池底は礫を敷き詰めただけであったこと、旧流路上に造られていること、今も湧水があることから、池の水は池底からの湧水によって保たれていたことがわかった。また、排水については、西接する調査（1996年度2次3区）で、12世紀の整地面で東から西へ流れ西京極大路東側溝に交差する溝SD9（図版3参照）を検出しており、これが該当する可能性がある。

d. 作庭の年代について

池の汀や堆積土から出土する遺物の年代から、古期の池は12世紀前半から中頃に成立し、ある一定の時期において新期の池に改修されたと考えられる。新期の池の堆積土には13世紀初頭の遺物が含まれるので、この頃までは園池として機能していたものと考えられる。この園池の上層は近世までの遺物の混じる耕作土である。

e. 想定される邸宅について

以上のことから、右京一条四坊十三町内には平安時代後期から鎌倉時代初頭までの間、南半部に園池を有する1町規模の邸宅があったことが想定される。その邸宅は、築地で囲まれた敷地の中央に南面する寝殿を置き、その前に庭を広げ、さらに南側に池を作るという典型的な寝殿造りの様式であったのではないかと考える。さらに、検出した園池の造営時期、汀の意匠の類似性、近接した位置関係から、この邸宅は、法金剛院と密接に関連していることがわかる。

ところで『中右記』長承4年（1135）三月二十七日の条に北斗堂供養の後に鳥羽上皇と待賢門院璋子が「東新御所」に渡ったという記述がある。⁵⁰⁾『百鍊抄』にも同日、「東新造御所」に渡った⁵¹⁾とある。『長秋記』には同日の記述に「新御所」は周防守藤原憲方が2年をかけて造営した⁵²⁾とある。これらの文献を検討してみると、この日供養された北斗堂は東御所の北に有るという記事から東御所と東新御所は併存していたこと、西門に於て堀を立てるという記事から新御所には西があったことが窺える。また、反閉などが行われていることから東新御所が東御所を増改築したものでなく、独立した邸宅であることをあらわしている。以上のことを考え合わせると、この十三町内の邸宅は「東新御所」に相当すると言える。

註

- 1) 『類聚國史』天長七年九月廿一日条「天皇幸大納言清原真人夏野新造山莊。」
- 2) 『三代實錄』天安二年十月十七日条「令住雙丘寺。元是右大臣清原真人夏野之山庄。今所謂天安寺也。」
- 3) 『中右記』大治五年十月廿五日条「仁和寺女院御願寺供養、」
- 4) 『中右記』大治五年十月廿九日条「今夕兩院初渡法金剛院御所、」「此亭本是昔天安寺舊跡云々、掘大池、西作御堂、大門西面、池東作御所、御門東面、造營之體、大略一町、宅過差美麗也。」
- 5) 荻須純道『正法山大祖伝訓注』 思文閣出版 1979年
- 6) 『三代實錄』貞觀十七年十一月十五日条「庶人伴善男沒官地一町在右京二條四坊。勅施天安寺。墾田八十町四。」
- 7) 無著道忠『正法山誌全』 思文閣 1975年
- 8) 森幸安「中古京師内外地圖」『改訂増補 故実叢書』38卷 明治図書出版株式会社 1993年
- 9) 杉山信三「法金剛院発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』 京都府教育委員会 1969年
- 10) 平田 泰「平安京右京一条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 11) 小松武彦・吉村正親「法金剛院境内」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 12) 小松武彦・吉村正親・小檜山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 13) 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
- 14) 「平安京大路・小路の路面および側溝」『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』 京都市文化市民局 2000年
- 15) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 16) 前掲11) 図69-2
- 17) 前掲13) 図29-41
- 18) 京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 掲載番号776
- 19) 京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平收藏品目録』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年 掲載番号19
- 20) 中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』 京都府教育委員会 1970年 第53図-1
- 21) 前掲12) 図52-4
- 22) 杉山信三ほか「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡第一次 伝飛鳥板蓋宮跡 発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第十冊 奈良国立文化財研究所 1961年 PL35-9
- 23) 木村捷三郎「六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『六勝寺跡』 六勝寺研究会 1976年 図7-SWA12
- 24) 前掲18) 掲載番号392
- 25) 尾藤德行・吉村正親「最勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』 京都市文化観光局 1995年 図28-16

- 26) 前掲18) 掲載番号401
- 27) 前掲23) 図7-SWA13
- 28) 前掲25) 図28-21・22
- 29) 前掲18) 掲載番号400
- 30) 前掲12) 図53-23
- 31) 前掲18) 掲載番号301
- 32) 前掲23) 図10-SWN39
- 33) 梶川敏夫「尊勝寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年 図7-30
- 34) 西田直二郎「法勝寺遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第六冊 京都府 1925年 図版第9-2
- 35) 細谷義治「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968）』 京都府教育委員会 1968年 図34-H5
- 36) 『知多の古瓦』 半田市立博物館 1993年
- 37) 木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年
- 38) 平尾政幸「平安京の石製 銚具とその生産」『研究紀要』第7号（財）京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 39) 『中右記』保延二年十月十五日条「法金剛院御塔供養事、」
『仁和寺諸院家記』「同塔瓦葺三重塔、」
- 40) 『中右記』保延三年八月六日条「院御幸仁和寺寶金剛院馬場内、競馬七番云々、」
『中右記』保延三年九月廿三日条「丑剋有行幸院御所仁和寺法金剛院競馬、」
『百鍊抄』保延三年九月廿三日条「天皇行幸法金剛院有十番競馬。」
『百鍊抄』保延四年四月廿七日条「天皇行幸法金剛院有十番競馬。」
- 41) 『百鍊抄』保延五年三月廿二日条「待賢門院供養仁和寺御堂。法金剛院東。左衛門權佐親隆造進之。」
『仁和寺諸院家記』「同南御堂、檜皮葺九間四面堂、」
- 42) 『百鍊抄』保延五年十一月廿五日条「待賢門院供養法金剛院御堂。為万歳御願。」
『仁和寺諸院家記』「同三味堂、瓦葺一間四面堂、」
- 43) 『台記』久安元年八月廿二日条「待賢門院崩、三條高倉第。」
- 44) 『仁和寺御傳』「久安元一乙丑八月廿二日、待賢門院被讓法金剛院、」
- 45) 『山槐記』保元三年七月廿日条「依法金剛院修理歟、」
- 46) 『兵範記』仁安三年七月二日条「鳥羽院御國忌、上皇御幸法金剛院、上西門院月來為御所、」
- 47) 『百鍊抄』承安元年十月八日条「上西門院統子供養法金剛院内小堂。太上法皇。建春門院御幸。」
『仁和寺諸院家記』「同東御堂、上西門御建立。檜皮葺一間四面、」
- 48) 『吉記』治承五年五月廿一日条「有火事、法金剛院御所云々、故待賢門院御所、當時名區也、近日殿上西門院御坐之間也、」
- 49) 『百鍊抄』文治五年七月廿日条「上西門院崩。春秋六十四。」
大日本史料第四編之二『仲資王記』文治五年七月廿一日条「上西門院御喪送、法金剛院邊火喪云々。」
- 50) 『中右記』長承四年三月廿七日条「還御法金剛院、又院女院御同車渡御東新御所、反閑陰陽助宗憲、」
- 51) 『百鍊抄』長承四年三月廿七日条「兩院始渡御法金剛院東新造御所。周防守憲方造進之。」
- 52) 『長秋記』長承四年三月廿七日条「予自是直參新御所、兩院渡御新御所。周防國司憲方此兩年造營也、」
「良久上皇女院同車渡御、於西門立榻、」
「反閑陰陽師宗憲、」

参考文献

- 鈴木久男「平安時代の洲浜」『ランドスケープ研究』第61巻第3号（社）日本造園学会 1998年
- 角田文衛『待賢門院璋子の生涯 椒庭秘抄』朝日選書281 朝日新聞社 1985年
- 古藤真平「仁和寺の伽藍と諸院家（下）」『仁和寺研究』第3輯（財）古代學協會 2002年
- 上村和直「御室地域の成立と展開」『仁和寺研究』第4輯（財）古代學協會 2004年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうしぼうじゅうさんちょうあと							
書名	平安京右京一条四坊十三町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-8							
編著者名	モンペティ恭代・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 いちじょうしぼう 一条四坊 じゅうさんちょうあと 十三町跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 はなぞのいまち 花園伊町41-7	26100		35度 00分 56秒	135度 43分 16秒	2004年6月 7日～2004 年8月28日	700㎡	病院移転 改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 一条四坊 十三町跡	都城跡	平安時代後期 ～鎌倉時代初頭	旧流路、整地層、 土壌、柱穴、園池	土師器、須恵器、 瓦器、輸入陶磁器、 焼締陶器、瓦類、 柱根、砥石	幾度も川筋を変えなが ら北東から南西方向へ 流れていた流路を埋め 立てて整地した面を検 出した。その上面で、 法金剛院に密接に関連 すると思われる邸宅 の園池部分を検出し、 その変遷が明らかとな った。			
		室町時代		土師器、瓦器、輸 入磁器、銭貨				
		江戸時代		土師器、施釉陶器、 染付				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-8
平安京右京一条四坊十三町跡

発行日 2004年10月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961